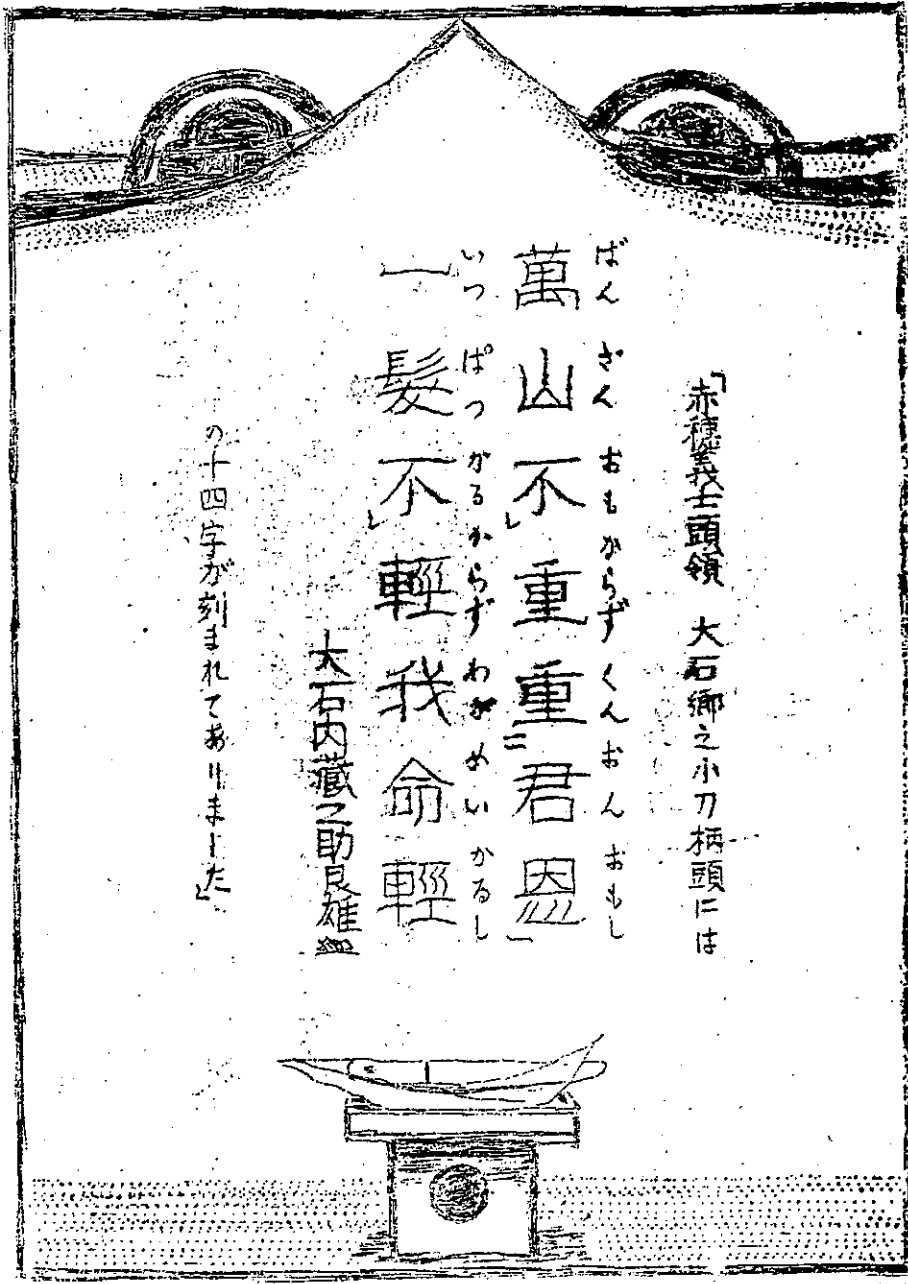


ふしでふ  
(号二十六百第)



學校日誌

十一月二日 防火日職負兒童參加  
 三日 教育塔寄附金 小學校職負兒童 青年學校職負生徒一同 拾圓三十一錢也  
 五日 歸郷除隊兵小保善一氏ヲ波止場ニ出迎フ(高等科兒童代表)  
 一〇日 二宮尊徳翁八十周年記念事業寄附  
 二二日 除隊兵 金川善太郎 山崎秀雄 兩氏ヲ波止場ニ出迎フ(高等科代表)  
 二四日 終業式

寄贈

十一月五日 五円 内山とみ子全快祝トシテ保護者會基本金へ 内山充輔殿

【一ネン】

アサ オトウサン ハ メガネ チカケテ  
 フク キガヘテ エウビンヤヨク ニ イッテ  
 シユト シテ ナニジニ キテ ゴハンヲ  
 ジベテ マタ エウビンキョク デ シゴト  
 ヲシテ エウガタカヘツ テ キテ ゴハン  
 ヲ タベテ カラ ラネオ ヲ ナホシマス。

ヨコヤマヒロユキ  
 フタクシノウチニハ キョウコガキ  
 マヌ トッテモ カハイイ キョウコ  
 フタクシガ  
 フンブル  
 トイヒマス トキョウコハ ワタクシ  
 ノ カラダニ カゲヨリマス。  
 ヲチノ キョウコハ カハイイ キョウコ  
 デス。

ミノルキヤン ハ ボクガ コバアレ ト  
 イヒマス ト ニコニコ ワラヒマス  
 セウシテ タイコ ラ タタクト ニコニコ  
 ワラヒマス。  
 ナワシテ オモキヤノ スズヲ ナラスト  
 フラヒマス。 サウシテ サトルキヤンカ  
 ミノルキヤン  
 トヨブト ワラヒマス。

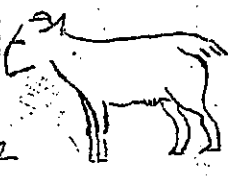
キクキヒロム  
 ワタクシハ ウチノ アカキヤンハダ  
 イスキデス  
 ウチヘ カヘツテモ アカキヤンノカ  
 ホヲ ミテ キマス。  
 ソシテ カツカケテモ アカキヤンノユ  
 トバカリ オモツテ キマス。  
 キノフ アダシハ ベンキマウヲ  
 ハラダミエ

アツシハミチコヲツレテ アツビ  
ニイキマシタ。  
トチユウデミチコガミカンヲホ  
シイトイッタンデフタシハドウ  
シヨウカトカソガヘイキムトム  
カフカラオバキヤンガキマシタ。  
オバキヤンガ  
「ミチコレ」  
トヨビマシタ。 ミチコガ  
「ハイヨ」  
トイヒマシタ。

トガシスミユ  
ウチノアカキヤンハイロガシ  
コクテカハイイアカキヤンデス。  
アサガハヤクテイツデモニコニコ  
ワラヒマス。  
ワタクシガガツカウカラカヘツテ  
ワレトワラヒマス。  
ウチノアカキヤンハイイコデス。

オキヤマアイコ  
ウチノボウヤハカハイイボウヤ  
ソトヘデス。トイツモニコニコ  
ワラヒマス。  
ワタクシガソトデアソソデキ  
「トネエキヤンカラマカキヤンガ  
トネエキヤンネエキヤン」  
トイヒエガラワタクシソバヘ  
ガケヨツテキマス。ワタクシガマ  
ムカフノトコロヘイクトマタ  
ボウヤガ  
「トネエキヤン」  
トイツデキマス。

つづり方  
ヨリ



やぎの子は、かはいです。この間、お  
やくしよに、やぎの子を大ひきつれて来て、こや  
の所へ、はりつけておきました。私は、いま  
うと見に行きました。

やぎは、豆つぶみたいで黒い。うんこをほ  
ろほろしてました。私はおもしろいので  
「おは、」と笑ふと、やぎの子は、び  
くりして、「めへへん」となきました。  
やぎは、さむさうに、からだをぶるぶるふる  
はせておきました。私は、  
「かはいさうに、さむいだらうか」  
と思ひました。見ると、もうぐん気がつ  
いて、おたので、大急ぎで、家へかへりました。  
また、あくる日、行って見ると、今度は、こや

の中には、いつておりました。私が行ったら、また、  
かはいの聲で、「めへへん」となきました。  
そのやぎの子のことを、今でも思ひつておます。

ぼくが父島に来た時、菅原幸夫  
ぼくが父島に来る日は、よこすかに天のうへ  
いかいおいでになる日です。いしやばは、と  
てもにぎやかでした。おぢさんやをばさんを  
あに、お見おくりをしておいた。いって、汽車に乗  
りました。おぼつのおばさん、おさかひさんの  
をばさんも、「幸次さん、いさをさん、も大々  
くなつて早くかへつて、いらつしやいな」と泣  
きながら、いつた時、汽車は走り出しました。  
ぼくは、ぼうしを上げて、「さようなら」と  
いひました。をばさんたちも、手をあげて  
「さようなら」といひました。東きやう  
で、汽車が下りて、ちくせんまるに乗りつて、  
「ぼうぼう」となります。お父さんが、もう  
父島だ。といひました。それから、ぼうぶに  
乗つて下りました。

家のねこ 鶴澤くみ

家のねこはもとやせたまぐれねこで  
した。家でほが火じにするのでとて  
おとつておました。ある日、よその  
をどつたので、朝山にすてに行きました。  
のあくる日、お母がかなしがりしました。  
お母ちゃん、「あ、すてなければよかつ  
た。」といひながら、なみだをこぼし  
た。ちやうど、七日目の朝、私たちは物ほし  
のねこで、「あ、ねこは今ごろは腹がへつい泣  
いておるのだらうな。」といつて話し  
と、とりぢやの上で、「にやお、にやお」と  
いふなき聲がしました。私は急いでお母  
ちゃんにいひに行きました。その時、ねこを  
見て、私は「あ、ねこやお前は、七日も朝  
日山へねたんだね。」といふと、ねこは「にやお  
となきながら、きよほうのねておる方に行  
きました。これからは、すてないで、かは  
いがつてやらうと思つておます。」

おかあさま 石田セン

うちのおかあさまは、きよ年ひやう氣で東京  
へ行きました。私は行きたかつたけど、學校が  
あつたので行けませんでした。そして、おみやげ  
はほしくないけれど、おかあさんのびやう氣が  
なほつて来ればいふと思つておました。  
そのうちに、私の所へ手紙が来ました。そ  
れを見て私も、おとうちゃんにをしへてもらつて  
へんじを出しました。さうして三日ぐらねた  
と、おんほうが来ました。私は、それを讀んで  
見ますと、「おかあちゃん、こんどのふねが  
かへる。」と書いてありました。私はうれしく  
なりました。  
さうして、いく日かたつと、本せんが来ました。  
私は皆と海がへむかへに行きました。海が  
はしけの来るのをまつておました。そのう  
ちに、おんまが来ました。おかあさんが舟から  
つたので、「おかあちゃん、おかへりなさい。」とい  
ふと、おかあちゃんは「おせんも、えつ子もよ  
つておたね。」とやさしくおつしやいました。

三年生

つばり方

くぐら

沖山敬次

僕はいつでも、まっかう。といわれま  
す。僕でも僕はいつもだまつておます。  
十一月にほげい船がきた。僕はうれしく  
つておまかせんでした。それから三日  
日たつて、まっかうくぐらをしてきてま  
した。僕がうれしがつて、ほげい會社の方  
へとんで行かうとしたり、と中で誰か  
ほげいお前の兄弟分をまつてきたと  
といひかたでしや、にさわつてたまりま  
せんでした。ほげい會社は、行かなくな  
誰か、からかひました。おんま、おんま、  
分、とからかひかたでしや、にさわつてま  
した。おんま、まつておると、その中に、僕  
を切りほじめました。見て、おんま、僕

私は五銭白銅

幸田絆子

私は少しかたしくなつてきました。それか  
わすぐかへつて来ました。  
私は五銭白銅の造へのきよく、かう生れた。そ  
れを下ぐは、銀ピカな白銅くわで、人の手  
のら手へと渡されて、合では、「おんま、おんま  
を、おんま、からかひました。けれど、私を  
をまつて、おんま、おんま、おんま、おんま、  
す。私をまつて、おんま、おんま、おんま、  
つて、おんま、おんま、おんま、おんま、  
も、おんま、おんま、おんま、おんま、  
渡された家に、おんま、おんま、おんま、  
友達と一語に、おんま、おんま、おんま、  
りかへられました。おんま、おんま、おんま、  
い、おんま、おんま、おんま、おんま、  
う、おんま、おんま、おんま、おんま、  
と、おんま、おんま、おんま、おんま、



ちつかう〜と思ひましたか思はず聲を  
出しました、村の人々が見る〜うちに大せ  
いになりました、下の方は消え多けれど上り  
方はながく消えません、そのうち消防の  
ポンプがきて消しおした、終つてか消防歌  
をうたつて村中をおるさました。

お正月

西浜 芳枝

お正月が楽しみな力で私は毎日ニコニコみばかり  
見てゐます、ほんとに早く来ればいゝと手で  
ぐんぐんやうしてゐます、暮には餅つき、すしは  
さなごいそがしい時です、

お正月にはきれいな着物をきて遊んだり夕方  
は学校の庭で羽根をついたりもうひまなどは  
ありません、お母さんたちはなほさらです  
おつぱらひたちがお酒を飲んでほんどうにお  
母さんはおわいさうです。

書初

浅沼 誠

先生が書初を書かせる、といつた、僕はうれ  
しくてたまらない、はじめは半紙に書いてゐた  
先生が「今度はまくらいつたり長い紙にかゝせる  
と言つた、僕はなほうれしくなつた、  
長い紙をもらつて書いた、書く時たんだか心  
お正月のやうだつた、先生の言ふ通りにか  
が少し下午にいつた、それからまつとへんに  
つた事は下の方がたくさんあつた、書方が終  
つて書初の手本を持つてかへつた

お正月

奥山 求

お正月はやゝ来い〜  
僕等はたのしんで  
来たらしい  
来なけりや皆遊べぬぞ  
早くこい〜  
いそいでおいで  
待つてゐる  
斜やろぞ  
海山こえて  
よろこぶだらう

### 尋五の綴方

● 夢

磯崎 静夫

「ことく〜と雨戸をた〜く音に僕が出て見ると  
外は雨でした。雨戸をあけると妙なかつ〜を  
た旅人がはいつて来た。そしてそのまゝ、僕のふと  
んにはいつてねてしまつた。僕はへんに思ひなが  
ら弟のふとんにはいつてねてゐた。すると夜中に  
あんなに苦しくなつたから目をあけるとさつぎ  
の旅人が僕をしばつた。僕は身ら〜が出來な  
い。しかしこのごろぼうはばかだつた。さるぐつわ  
をしたなかつたから僕は大声で「おらぼう」と叫んだ。  
家の人は起きて僕の名をよんだので僕はすぐ  
ごろぼうをおつかけた。そしてごろぼうにとびつ  
かうとしたところ不意におとしあなに落つてこ  
た。はつと思つた時目がさめた。僕ははつとしてな  
んだ夢かといつて言つて又ねた。

● 朝

金川 恒夫

僕が今朝起きると家のコック所の方で誰かさわ  
いで居ました。其所に僕が目をおこすなりながら歩い

て行く〜と三子が起きて何か飲んで居ました。  
僕は近寄つてそつとだましてのみました。する  
とあんなにのんだものだから泣き出しました。  
そこへお母さんが来て「三子、何して泣くんだ  
ときくと、兄ちゃんのみん飲んでしまつた」と  
いつた。僕は又いそいでねどこにもぐり込んで  
すると隣の雞がコケコツコウとないて夜は明  
けました。

● 考査の上矣

海野 糸子

この間考査の紙を返してもらつた時へんな矣  
だつたので私は心の中で、こんな矣をとつてお  
母さんにおこられたらうかと思つた。そし  
て見せ度くはなかつたけれど思ひきつてかば  
んにしまつておいた。そして家へかへつてお母  
さんに見せると果して「こんな矣を取つてなん  
だらう。皆はい、矣を取つて居るだらう」と  
いはれました。その時私はお母さんに心配をか  
けて悪かつた。これからは一生けんめい勉強し  
やうと思ひました。

● あみもの

浅沼 十三子

私はあみものが一番好きです。今あんで居るのは  
セイタです。今から幾日か、つたりセイタがあ  
みされるか、それが一番たのしみです。あんだら  
どんなにきれいになるか、あみきれたら一番先に  
着て来やうと思ひます。毛糸があんだものが六  
枚になる中で今あんで居るのが一番いいと思ひ  
ます。

菊池久香

楽しいお正月が目の前に迫つて来た。方々からも  
ちつぎの音がべつたんこべつたんこと聞えて来  
る。私の家ではどこでつくだらう。私の弟は又土  
の中でお正月を迎へるのだ。私たちはお正月にな  
るともちを食べるが弟は何も食べないで土の下  
にわてゐる。お正月がくれば弟はもう五つにな  
る。お正月に五つ六つの子供はたこ上げをするの  
に、土の中で何もしないで居るのはたいくつだら  
うから、たこを買つてお墓に上げてやらう。去年  
も上げてやつたけれど一日で破れてしまつたの  
で今年のお正月にはやぶけないやうに上げてや  
らう。

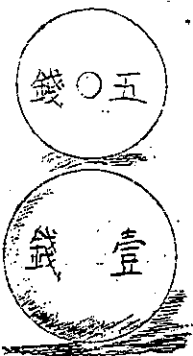
綴方の時間 淡沼和夫

かんくんと鐘が鳴つた。綴方の時間だ。教室に入  
つてざつと考へて居た。先生は「自題」と言つた。  
けれど題のない人は「お正月か」二期を「送る  
といふ題でかけ」とも言つた。だけれども僕は  
かけない。何かかんたんなものを書き度いと思  
つたが仲々考へつかない。その内にもう考へつ  
いた人は紙をもらひに存らんで居る僕はやつ  
と前によんでもうつた六年生の綴方を思ひ出  
した。よし僕はあれをかくといつて書いたのが  
この綴方である。

お正月

青野芳正

月日が立つのは早いものです。もうお正月が近  
くなりました。僕等もおとなの人も一つ年をと  
ります。お正月をどんなにみんなたのしんで居  
るでせう。男の子はたこ上げ、女の子はねつき  
やかると取をします。お正月はほんとに楽しい。  
もちもたべられるし、ごちそうもたべられる。僕  
のすきなのは、きなこもちと、さつまいもです。



此の綴方

此の頃

佐々木仁作

此の頃は夜が短いのか、いくらわてあわたや  
うな気がしない。もう夜が明けたの外人めあるく音がする。夜をしづけさはここからがやから  
れてくる。そのうちに鳥の音が一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ、九つ、十つ、  
人の声、大きくてまたと思ふと、つるべの音がギョー／＼ときくとくる。いつまでもこんなこと  
を繰り返れないうちからあきて出て見るともう明るくなつてゐる。うゑふは青々として、あいつつ  
をしないばかりに、こちらを見てゐる。家へ入ると何時の間にかおぼろが来て、たべただけの  
大度がキヤンと出来てゐた。

此の頃

藤澤清

二月もくればやうとてゐる。まもなくお正月である。今年で僕らも卒業だ。ちやうと今頃は  
二月の初め四十七士の義士が吉良の屋敷に討入りをして、吉良の首をとり、亡君の仇をうち  
つてに名をとどろかしたのであつた。僕らも勉強は戦争と思つて、そのつもりで一生懸命やりな  
れはならぬ。そして来年はたのしく愉快にお正月をすごさなければならぬ。お正月をたの  
しくすごすには今から一心に勉強してゐなければならぬ。勉強が不真面目であれば、たのし  
いお正月もたのしくない。僕はこれをばは年のくれにちかつた。

お正月 コマのやうな子的心



此の頃

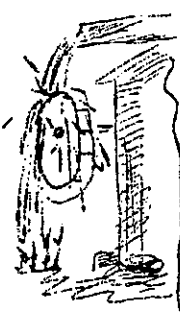
鶴千賀子

師走といふ声を聞くと、元録十四年十二月十四日降りしきる大雪を幸に吉良の屋しきに計入つた入心。義士の事が思ひ出される。人の心も一年の初めのお正月をひかへてその仕度にいそがしい。朝飯をすまして、庭に出る時とんび山の上でもう甲のうなりの音がする。私は二学期の終業式が心配である。二学期はどうしてあんなに勉強しなかつたらうか。なごといふこゝろが今更まがら身にしみて来る。お父さん、お母さんも私に「今学期の成績はどうだ」ともかかれると自分でも上級の学校に上るのに、こゝろに勉強が出来なければどうしようかと思ふことがある。学校へくれば友達同士でお正月は誰と遊ぶのなごといふてある。一方にはお正月を間近に知らせる年。始めのためよくての唱歌がうたはれて楽しんでいきこえて来る。

此の頃

宮崎也子

東京の寒さに出會つたことのない私たちは、この頃の陽気を寒いと一か思はれない寒いくく口に出すたびにおぼあまんにいはれる。此の頃の陽気は内地の九月頃の陽気だといつてきかされる。私はかういはれるとそれを考いて此の二、三日さむくも寒いなどと口に出さない。そして寒く日なとほおふろに入つて温るのが一番のたのしみです。



休日はば凍るオのもなよ水車

高一作文

亡き母

横尾 梢

そよ／＼と秋の風が吹いてゐる十一月十二日私の母は死の國へ旅立つてしまひました。家のカであつたあのやさしい母が。私の心はどんなたつたでせう。母は死ぬ間際に私と姉と兄さんをおもとによんで「お前達をのこして行くのはいやだけれど私はもうだめなんだよ。こづえお前は勉強が大事だから親がなくてもしつかりやるんだよ。政子は姉としての道、辰夫は兄としての道を行きなさい。兄弟力を合せてやるんだよ」といつて私達をじつとみうめ、さも名残惜しげにまぶたをとがけてしまつた。私は母にとりまかつて泣いた。だが母は再び目を開いてくれなかつた。もう此の世には再びきてくれないのだ。庭の木は冷い秋風に吹かれて無心にゆれてゐる。母もな、父もな、私は毎日々々さびしい日を送つてゐる。私はどう／＼親をし子になつたのだ。

芳子さん

小野 清子

芳子さんは此の船で内地に轉校して行つた友達だ。芳子さんはいつも親切でよい友達だつた。そしていつも面白く私達が何か云つてもニコ／＼しなから返事をした。たまにはおまじけて云つたことを本氣にしておこることもある。けれどもおまじけなほつて又冗談などを云つて笑ふ。全く芳子さんは私のよい友達であつた。おまじけしいことに轉校してしまつた。

お正月を待つ

毎田美津



お正月も近づいて、なんと早く忙しくなつて来た。町の商店では大賣出をしはじめた。お正月の仕度をするのだから、人々は忙しうに歩いている。この前も買った書物は去年よりすつと、むづかしいので一生懸命に練習をせよ、お正月の展覧會にはどうしてか一等になつてよい年を迎へるつもりである。お正月が早く来ればよいと思ふ。

ねこ(しろ) 海野 祥雄

「ギヤシ」となりて僕の足下にはかきだした。御飯をくれと、おれがせう。僕が魚をやるべくへて行つた。しばらくして歸つて来たねこを抱いておるとなりぬ。犬が二匹来たのでねこを放してやつた。すると二匹の犬はしろを見て「わんわん」と吠えた。しろは背をまわしてうなつた。「しろ」と云ふと二匹の犬はおどろき、後さかりをした。犬はとほけ顔してしろの前に出ると右手でやられた。犬は益々おこつてわんわんと吠えてゐる。ねこはうなつておるしろが垣根の中に入つてしまふと犬は小さい穴から顔を出した。すると又右手でひつかれた。ねこはしろん顔をしてみろりと地べたにねた。

年の暮

佐藤 平次郎

昭和十年もあと十日で過ぎ去らうとしてゐる。町には大賣出しのしるしに萬國旗があつちにもこつちにも風はひらひらと吹いてゐる。何となくお正月気分になつて来る。景品付割引景品付割引であつちの角にもこつちの角にも色々の色にいろどられてはり出されてゐる。商人はいさかしさうに自轉車に乗つて走廻つてゐる。呉服屋の家をのぞけば美しい帯着物すへこのものかとりぐにかざられていて、どの店でも目かざる様に美しい。

高二

静かな海辺……石津俊彦  
静かな夜、波も静か地上の萬物比自静かである。海上より吹いてくるそよ風は胸を吹かれながら深く呼吸をした。つひつひと波は船の上には寂寥さうなんだ。静暫く……まどろむと、ハルモニカの美音が涼しい風と共に流れこむ。おきあがってハルモニカをとり、ヴェニス舟歌を吹き出すと何時のまにか金雄君が後ろに立って合奏してゐる。夜のはりは次第に山の夕方の木を包み、さう何も見えない波は何處までもなびきり涼しい風が氣持よく吹き渡つてゆく。

朝

奥山サキ子

起きて見ると庭は何時より、しどろしどろと雨降つたのであらう。と、小屋のわきへきて見ると金網に露が白く光つてゐる。

そばへ上つて、ゆすつて見ると、ポクポク、みんなきれいにあちた。雞は一せいに、はね上つた。海岸に行くも、今日に限つて扇浦が手にとるやうに見える。波は静かだ。囀りを聞いたやうである。其の青疊の上にカネをとおろす漁師が一日の務を此處で過すのである。お日様も旭山から顔をだしはじめた。

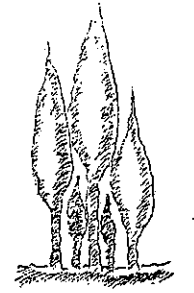
僕の内、柱時計

吉塚光臣

僕の内、時計は非常に正直でなま

けない。雨の日も嵐の日も風の日も、たゞ同上速さでゴチゴチと時を刻んでゐる。だが僕にとっては大敵である。僕が犬いびきをかいて眠つてゐると、さう

朝の五時になる。五時には起きなくてはならない。だが僕はまだ眠い。あゝ眠い。僕はこんな時は、なまけな。時計はいやだと、つくづく思ふ。ところがよい事には時計が病氣になたと見えて、時々おくれたり時間／＼とくたない時が出来てきたので叔父さんが、あゝこれはねちがゆるんだらうと言ひながら時計の所に來て、これはやつぱりねちをかけたやうなかつたから、ひもは腹だつたんだよと言はれたから僕が時計の腹いたよと言つて一同を笑はした。時計にはねちをかけたやうと、かゝるはかゝるは四五回も廻つた。それからほんとは雨の日も風の日もユチ／＼と時と刻んでゐる。時計が世の中一番働きのものだ。



# 萌える若草

青年學校だより

## 発見

各位の認識の増進と青年の時代覺醒の進展から、青年學校に對する理解が見立つて來たやうに考いられて、喜びにたえませんければ、一部分は青年自身に於て半睡半起時勢の警鐘の音が耳に入らないから、入つても動けないか動かないか、意圖の理解するものが無いでもないのは我大村の爲に心許ないものと云はなければなりません。耳はモウ斯やうなことで暇を費す餘時がありません。来年は皆様にコンナ話を耳に入水なうにお互にお骨折りを希います。

十二月入學者姓名

大澤誠三郎。上原五郎。佐々木久信。中村久吉

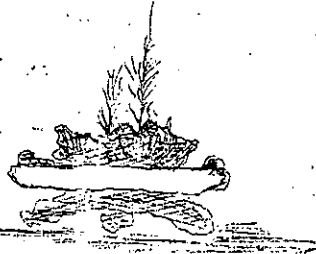
大村青年學校在籍生徒數 昭和十年十一月三十日現在

性別	本科	科	研究科	専修科	合計			
男子	三七	二	一七	四	二	五	八	八

女子	七	一〇	一	一	三	二	一	一	五	〇
----	---	----	---	---	---	---	---	---	---	---

明治天皇御製衣

正しく生ひ茂らばよおしハ草  
 おとこおみまの道をおかちて



昭和十年十一月

女子学校編輯

